

塩沼亮潤・板橋興宗著『大峯千日回峰行—修験道の荒行』

私は山伏の修行については全く知りません。しかし、山に入ると奥多摩にも大峯山の山伏達の残した拝礼跡が幾つも見受けられます。富士古道にもありました。関西からはるばると、関東の山々まで大峯山の山伏たちが来ているのだなあといつも感心しています。

塩沼亮潤さんは1987年に吉野の金峯山で出家得度した人です。彼は23歳の1991年に大峯百日回峰行を満行しました。話には聞いていましたが峰行とはどういう事をするのか知りたくてこの本を手に入れました。

大峯百日回峰行とは吉野山蔵王堂（364m）から大峯山寺山上ヶ岳（1719m）の往復48kmを歩き、これを100日間続ける修行だそうです。5月3日から9月22日の間の100日間で修行するそうです。最初の50日間は24km先の大峯山寺山頂の宿坊で一泊し翌日下りてくる。次の50日間は一日一往復するそうです。初めの50日は笠と杖が使えないそうです。塩沼さんは5月3日に入行し8月10日で満行しましたそうです。

回峰行の一日とは午前零時に起床。滝行。蔵王堂で着替えし、山伏の姿になる。お握り2個を食す。零時30分に出発。百丁茶屋跡あたりで夜明け。そこで朝食。8時30分に山上ヶ岳（1719m）着。そこで早い朝食。そこから来た道を吉野山に向けて下り、午後3時30分に蔵王堂（364m）着。食事はお握りと水のみ。全48kmを15時間かけて歩く。24時間の残りの9時間のうち睡眠5時間。残りの時間は次の日の準備・掃除・洗濯などに使うそうです。

この修行中厳しかったのは約1400mの高低差を歩くため身体的に大変だったそうです。膝に水が溜まり60日目くらいにこたえてきたそうです。歯痛や腹痛も出てきたことが大変だったそうです。

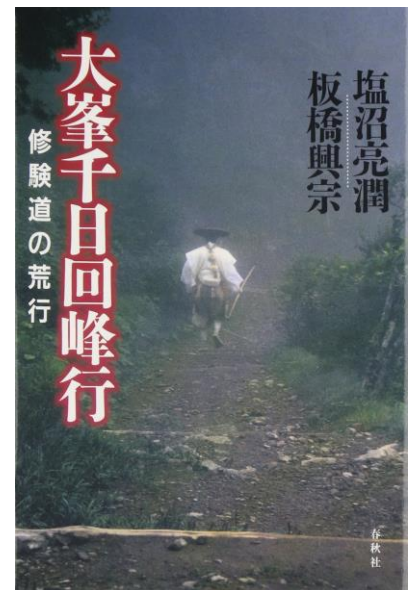
大峯百日回峰行を終えて翌年1992年。塩沼さんは大峯千日回峰行に挑みます。基本的には5月3日から9月22日の間の120日を歩き、9年かけて千日回となります。

この修行もお握りと水のみで4ヶ月過ごすので栄養失調状態になるそうです。行が始まって一ヶ月くらいで爪がぼろぼろ割れてきたり、血尿が出たりして体力的に限界近く追い込まれる中での修行になるそうです。

この行が始まったら、もう休むことは許されないというのが凄いです。もし行をやめるような事があったら腰に巻いてある紐で首をつるか、あるいは腰に差してある短刀で自分の腹を切るか、死して行を終えるという定めだそうです。

9年間の修行の間、台風の大嵐に見舞われたこともあったそうです。目の前の道が増水で崩落し自分が流されたこともあったそうです。普段なら30秒で通過するような所が30分以上もかかった。熊に襲われたこともあった。登山中、マムシの頭を踏み潰したことを知らずに下山途中で知った。猪の背中に座ってしまった。などなど自然界の生き物たちとの出会いも書かれています。

「苦しみの中に楽しみを見出す」と塩沼さんは語ります。「山の修行とは、いい自分も悪い自分も力は五分と五分。山とも五分と五分。そういう中でいろいろな駆け引きをしながら何か一つ、目標に向かって進んで行く」「修行をするごとに山の奥深さを知り、涙するごとに御仏の優しさを知った。大自然の中で、自分が生きているという考えではなくて、生かさせていただいているという考えをだんだん学んだ」と語っています。



塩沼さんは2000年9月28日から8日間に渡り、四無行というすさまじい修行を行います。四無行とは、食べない・飲まない・横にならない・眠らないという行を8日間行うというのです。真言宗にはこのような想像を絶するような超人的修行もあるのですね。

私は修行で山登りをしていませんが、大自然の中で生かさせていただいているという気持ちには通じるものがあります。日本の登山道には多くの山伏たちの軌跡が残っているのだなあと改めて思いました。

日本の山は昔から宗教者の修験の場として開かれて来ました。多くの山頂には祠や神社があります。登山をしているとどうしても宗教的関わりに興味が出てきます。大岳山はオオカミを奉っています。日本文化と山が密接に繋がっていることを実感します。

縄文時代から続くアニミズムから渡来人による弥生文化を経て、天孫降臨説などを取り込んで八百万の神々が活躍する記紀神話の世界が形成されたことに興味が尽きません。

私たちはスポーツとしての登山を楽しんでいますが、一つの視点を教えてもらいました。

(深澤 裕)

春秋社 2007年3月15日刊 1800円